

2021 春学期：提供科目一覧（4月～6月）

学部

	コース名	科目名	教員	時限	学びの内容
1	聖書	キリストと世界Ⅱ-旧約	菊池	火曜3・4 時限目	教会における聖書の読み方は新約に偏重する傾向があります。本来、キリスト教世界観とその信仰の実践的展開には旧約聖書の神学は不可欠なものです。旧約と新約の一体感と連続性に留意しつつ、聖書全体の歴史的流れ、各書の位置づけ、背景となる地理、旧約聖書から始まる世界観、言語と聖書翻訳の基本的知識を掴むことに主眼を置き、クリスチャンとして聖書を全体として読む意義と幸いを体験的に得ることを最大の目的とします。
2	聖書言語 (ヘブライ語)	ヘブライ語Ⅰ	菊池	火曜・金曜 2時限目	旧約聖書の主要原語であるヘブライ語の初級文法の習得を目指します。右から左へと記される文字、発音から始めて、重要な動詞活用や文体論に至るまで文法的研鑽を積み重ねて行きます。慣れ親しんできた聖書の用語の深い意味を知り、そして読めるようになる喜びや幸いの伴う学びであり、生涯の宝となる言語の習得です。次の段階である講読と聖書釈義に繋げ、そして説教者が直接原典に触れて旧約聖書からも豊かに語るための基礎作りとなる学びです。
3	聖書言語 (ギリシア語)	ギリシア語Ⅰ	須藤	火曜・金曜 2時限目	新約聖書の原語であるコイネーギリシア語文法の習得を目指します。当時の地中海世界で広く用いられ、旧約のギリシア語訳（七十人訳）から多大の影響を受けた言語です。その言語的文化脈と旧約聖書の背景をもって新約聖書の言葉に触れることは、邦訳聖書には訳出しきれない微妙な意味合いや歴史的背景を読み解くためには不可欠です。各品詞の基本的な語尾変化を修得して、その意味を理解することが初級文法を修得することになります。
4	神学	キリストと世界Ⅰ-神学	岡村	金曜3・4 時限目	キリスト教神学の基礎を、大きく二つのテーマを掲げ、前半と後半に分けて学びます。前半は「神学とは何か」「神学的に考えるとはどういうことか」「現代社会と神学の間にはどのような関係性があるか」といった根本的な問いを中心に、神学を身近なものとして共に考えます。後半は、キリスト教福音主義神学の最も重要な教義のひとつである「聖書論（啓示論）」について、聖書の権威、聖書の霊感性、聖書の無誤性、聖書の正典性等のトピックを中心に学びます。
5	ユース ミニストリー	キリスト教教育Ⅰ	徐	火曜3・4 時限目	福音的な聖書理解に立ちつつ「教育」に関する聖書の言葉から学びます。また組織神学の中で「教育」がどう位置付けられるかについて、ミラード・エリクソン著の「キリスト教神学」を用いて確認し、キリスト教にとっての教育の果たすべき役割について学修します。さらに聖書やキリスト教史の中で用いられてきた様々な教育の方法論に関する理解を深めつつ、ユダヤ教育で用いられるハブルータという方法を用いての神学的議論や、アクティブラーニングの実践を通して学びます。
6	教会と社会	キリスト教と開発	森田	木曜5・6 時限目	世界の貧困と開発援助について国際開発論と聖書的観点から考察します。前半は、発展途上国の貧困の実情を概

				観し、「貧困」と「開発」の定義について開発学と聖書的観点から理解を深めます。事例として、政府間援助、国際協力 NGO、社会的企業等を扱い、それらの貢献と共に、現場で直面する課題についても批判的に分析します。後半は、貧困に直面する人々にとっての正義や、人と社会に必要な包括的変革について考え、キリスト者としての適用を議論します。
7	(同上)	東洋思想	大和 木曜 3・4 時限目	東洋思想をキリスト教との出会いの歴史や、キリスト教思想との比較を通して学びます。東洋には広く現代世界に影響を与える哲学的な宗教としてのインド仏教があり、祖先崇拜を背景として人倫を説く中国の儒教が大きな影響力をもって存在します。日本には民族宗教としての神道が様々な領域に浸透し、近代の国家神道の再興を求める勢力は小さくありません。思想の垣塙のような日本において、キリスト教信仰に生きること、キリストの福音を弁証してゆくことを目指して、東洋思想を広く学びます。

大学院

コース名	科目名	教員	時限	学びの内容
1	聖書学	解釈学	伊藤 水曜 5・6 時限目	<p>生きることは解釈することです。聖書を解釈する前に人は、誰もが自らを、また人生を解釈しています。自らを中心に位置付けた世界が私たち個々人が生きる世界に他なりません。私たちは無意識のうちに自らとの関係で物事や人を解釈して理解しています。この無意識のうちに実行している解釈を意識することが重要な課題です。これこそが本科目の意義です。本科目では、聖書を解釈・理解するとは一体どういうことかについて、古代・中世・宗教改革から、シュライエルマッハー、ガダマー、リクール、読者応答批評・受容理論、記号論・構造主義・ポスト構造主義、フェミニズム神学や解放の神学等の社会批評に至る近代及び近年の聖書解釈の方法論を、その背後にある哲学的枠組みを踏まえて考察します。講義に重点を置きつつ、各自が思想家またはテーマを選び授業で研究発表した上で、聖書解釈と関連付け考察を行う演習を行います。ポストモダンの今、思想的哲学的考察を抜きに真の意味で聖書を読み、理解して説き明かすことはできません！</p>
2	実践神学	人間理解とミニストリー	岡村 火曜 1・2 時限目	<p>ミニストリー (diakonea) とは、神と人に仕えることを意味するギリシャ語です。神を知らなくては神に仕えることはできないのと同じように、人を知らなくては人に仕えることはできません。宗教改革者カルヴァンは、「神を知ることなくして、自分を知ることはいかなることもできない。自分を知ることなくして、神を知ることはいかなることもできない。(Institute 1.1.2-3)」と語りましたが、ミニストリーに関わる者が、自らを霊的に、そして心理的に知ることは必要不可欠であると言えます。</p> <p>このクラスでは、質的な人間研究を基礎に、ミニストリーにおける自分理解、および他者理解の重要性を確認し</p>

				ます。その上で、世代を超えた共同体として存在すべき教会のあり方を見据えつつ、教会運営における人間理解と協働について学びます。またインタビューやグループディスカッション等を通して、教会教職者に必授な問題分析力と解決能力についての理解を深めます。
3	歴史神学	宗教改革史	須藤	水曜 3・4 時限目 「神学・教会特殊研究Ⅴ(宗教改革史)」は、歴史的偉業を成し遂げたルターに焦点を当て、彼のテキストを扱います。ルターによって始められた宗教改革は中世のカトリック的社会構造を根底から変革し、プロテスタント教会と近代市民を生み出しました。この変革の起爆剤は、修道士マルティン・ルターが神学教授としてヴィッテンベルク大学の聖書講義を通してたどり着いた、彼の神学的確信にありました。本特殊研究では、「神の義」をめぐる神学的突破によるルターの神学形成、すなわち、「十字架の神学」が表明される『ハイデンベルク討論』(1518年)から『ローマの信徒への手紙序文』(1522年)へ至る過程を追跡します。授業は、第4回まで講義形式で行い、第5回以降は演習形式にします。演習において、学生は指定されたテキストに関してまとめたものをレジュメにして配布し、20~30分の発表をします。本特殊研究のねらいは、各自がルターの重要なテキストに関する分析と発表を通して、神学的突破への途上にある彼の声に直接耳を傾け、ルターが捉えた福音の本質を把握することで、宗教改革史におけるルターの福音理解の重要性を見極めることができるようになることです。
4	宣教学	日本の諸宗教とキリスト教	大和/ 清野	金曜 1・2 時限目 このクラスは日本の諸宗教に対するキリスト教の弁明に取り組むことを目指し、二人の教員のオムニバス形式で行われるものです。 日本の宗教の根底には葬送儀礼があります。個人的には「無宗教」を標榜する大多数の日本人も、社会的な慣習として様々な宗教的儀礼に従う生活を当然のこととして受け入れています。日本の通過儀礼としての葬送儀礼にキリスト者としてどう関わるのか、日本でキリスト教葬儀をいかにやっていくか。この本質的な宣教課題に、教員の著書を教科書として取り組みます。(清野4回) 日本の民俗宗教としての神道は、古代から天皇と深いかわりを持っています。インドから伝来した仏教は当初から神道と混淆する神仏習合という形で日本に定着してきました。創唱宗教ではない神道は教義ではなく祭や習俗として継承されてきました。近代以降の天皇制国家においては、天皇を現人神とする国家神道を形成しました。太平洋戦争敗戦後、国家神道は解体されて神社本庁は包括宗教法人となりました。現在も地域社会に根付く神道と天皇制をキリスト教の視点から考察します。(大和6回)。